
言葉の贈り物

抹茶小豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
言葉の贈り物

【Nコード】
N1317W

【作者名】
抹茶小豆

【あらすじ】
フェアリー国の小人たちがみんな夢中になっていることがありました。

それは『言葉の贈り物』です。

しかしコリンズは……？

これは妖精たちの住まう国、フェアリー国のお話です。

鬱蒼と茂る針葉樹の森を抜けると、そこには小人たちが村を作って暮らしていました。

ふとつちよさんや、メガネ君、ブロンドの美しい髪の可愛い女の子もいます。

そんな小人たちが、今とっても夢中になっていることがあります。それは、『言葉の贈り物』でした。

虹色の風船に手紙をつけて、大切な人に言葉を届けるのです。

真つ青な空に浮かぶ虹色の風船がふわりと、ふとつちよさんの手の中に降りてきました。

「うわーい、やったあ！ リズからの手紙だ」

ふとつちよさんの笑顔を見届けると、虹色の風船はシャボン玉のようになくなってしまいました。

『お仕事大変だけど がんばって！』

最近仕事が大変で、とっても疲れていたふとつちよさんですが、友達のリズから『言葉の贈り物』を買ってとっても元気になったのでした。

そんな小人たちの様子を、茂みの陰からこっそりと見ていたコリンズは面白くありません。みんなに意地悪ばかりしてまわるコリンズには、誰も『言葉の贈り物』をくれなかったからです。

「ふん、なんだい、あんなの。みんなで慣れ合っているだけじゃないか！ 馬鹿みたい」

コリンズは足元の石ころを蹴飛ばしました。

その後ろで、ミドルが寂しそうに空を見上げました。

透き通るような青空に、虹色の風船がいくつも浮かんでいます。その光景はとても美しく、そしてミドルの心を切なくしました。

「そうかな。僕は『言葉の贈り物』が欲しいよ」

ミドルがそう呟くと、コリンズがミドルの頭をはたきました。

「根性無しの、甘ったれ！ そんなこと言っているから、お前は女々しいんだ。このうすのろ！」

コリンズが、激しくミドルを罵倒します。

すると……。

ふわふわわり。

二人の目の前に、虹色の風船がひとつ落ちてきました。

「俺のだ！ それは俺のだからな！」

コリンズはジャンプして風船に手を伸ばしました。

しかし風船はコリンズの手をすり抜けて、ゆっくりとミドルの手の中に落ちてきたのです。

「ああ、エリーからだ」

ずっと寂しい思いをしていたミドルは、飛び上がって喜びました。そんなミドルを横目で見ながら、コリンズは鼻を鳴らして家路につきました。

赤い煉瓦の道を、しょんぼりと肩を落として歩きます。

「ちえっ」

悲しい背中に影法師が、長く長く伸びていました。

夜空に星が瞬き、乾草のベッドの上に横たわっても、コリンズはなかなか眠ることができませんでした。

窓の外で、優しくお月さまが微笑んでいます。

「神様、どうか俺のところにも『言葉の贈り物』が届きますように」
コリンズはそつと心の中で神様にお祈りしました。

次の日も、またその次の日も、朝早くからコリンズは空を眺めました。

青い空にはたくさんの『言葉の贈り物』を携えた、虹色の風船が飛んでゆきます。

しかし、コリンズのもとに『言葉の贈り物』は届きませんでした。

するとコリンズはだんだん腹が立ってきました。

『言葉の贈り物』を貰って喜んでいる人の笑顔も、虹色の美しい風船も、何もかもにむしゃくしゃしやするのです。

そして、コリンズはあることを思いつきました。

「ようし、見ている！」

虹色風船に、みんなの悪口を書いて飛ばしたのです。

風船を貰った人は悲しみました。悪口を書かれて、とても心が傷つきました。

そして次第にみんな、心が荒んでいったのです。
今まで優しさと愛に満ちていた『言葉の贈り物』に、お互いの悪口を書くようになりました。

虹色だった風船もだんだんと黒ずんで、灰色の風船になりました。

「虹色の風船なんて、なくなっちゃえ」

意地悪な微笑みを浮かべて、コリンズが呟きます。

すると、ひとりの少女が虹色の風船を飛ばそうと、小高い丘の上に佇んでいるのが見えました。

コリンズは、丘の上に走っていきました。

「おい、お前。虹色の風船なんて飛ばさせやしないぞ」

そう言っで、コリンズは乱暴に少女から手紙をひたたくてしまいました。

「あはは。こんなもの無くなっちゃえ！」

コリンズは少女の手紙を細かく破って、捨ててしまいました。

風が紙切れを空に舞い上げました。

「ひどい！なんてことをするのコリンズ。せつかくあなたに『言葉の贈り物』を贈ろうとしたのに」

少女は泣きながらその場所から走り去ってしまいました。

コリンズは必死に紙切れを集めようとしてましたが、風に運ばれて紙切れはもう見つかりません。

「うわーん、わんわんわん……」

コリンズは声を上げて泣きました。

目が溶けてしまうほどに泣き続けました。

日が落ちて、すっかり辺りが暗くなる頃、そっとコリンズの肩に手を置く人がいました。

銀色の髪をした、とてもきれいな人です。

「もう、泣くのはおしなさい」

「あなたは、誰？」

「私は月の精です。あなたはずっと『言葉の贈り物』を欲しがっていましたね」

「うん。今日ようやくこの俺にも『言葉の贈り物』を贈ってくれよ

うとした人がいたんだ。だけど俺……」

「あなたは前に、怪我した彼女を町までおぶってあげたことが、あったでしょう？　彼女はそれがとっても嬉しくて、一生懸命にあなたに手紙を書いたのです」

「なのに俺……」

そういつてコリンズは、また泣き出します。

「じゃあ今度は、あなたから『贈り物』をしたらどうですか？　この種をあげましょう」

そういつて月の精は、コリンズになにかの種をくれました。

「なんの種ですか？」

コリンズは不思議そうに首を傾げます。

「それは『幸せの種』ですよ」

月の精はそういつてニコニコと微笑みました。

「『幸せの種』をあなたが育てて、彼女にプレゼントするといい」

コリンズは『幸せの種』を植木鉢に植えて、大切に抱きしめました。

「この花が咲いたら、きっと彼女にプレゼントしよう。そして悪口を書いて傷つけてしまったひとりひとりにも、この花を贈って慰めよう」

そんなコリンズを、月が優しく照らしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1317w/>

言葉の贈り物

2011年9月3日12時22分発行